

今回の在外研究では、「ペアやグループの動機づけと第二言語習得の関連」という研究課題のもと、カナダ・トロントのトロント大学、ならびにイギリス・レディングのレディング大学にて研究に取り組みました。これまでの第二言語（英語）学習に関する動機づけ研究は「集団」（クラスなど）や「個人」を対象とした研究が数多く行われてきました。一方で、近年の学校教育における英語授業ではコミュニケーション活動がより一層重視されるに伴い、「ペア」や「グループ」での学習活動が増え続けています。本研究課題ではこのような研究と実践のギャップに着目し、「質の高い学びを生み出すペアやグループは、どのような特徴があるのだろうか?」、「うまくいかないペアやグループには、どのような問題が生じているのだろうか?」などといった疑問に直接的に取り組むことにより、教育実践に対して有益な示唆を得るとともに、動機づけ理論のさらなる発展・深化にもつなげることを目指しました。

上記の課題に取り組むため、在外研究期間中には国内外の複数の研究者らと協働し、様々な調査や実験などを実施するとともに、その成果を学術論文としてまとめるなどの活動を行いました。例えば、Hiromori (2021) では近年の英語授業で頻繁に用いられている協働的ライティング (collaborative writing) に対する取り組みを、学習者の行動的側面（課題への取組時間、英作文のワード数）、言語的側面（英作文のスコア）、情意的側面（課題に対する態度）といった幅広い観点から捉え、ペアワークの実際を包括的に検討しました。その際、ペアによる取り組みの特徴をより明らかにするために、個人による取り組みとの比較も実施しました。研究の結果、課題に対する肯定的な態度を除き、ペアと個人の取り組みには顕著な差は見られなかったこと、つまり、ライティング活動においては、ただ単にペアになって取り組んだからといって、それは個人での取り組みよりも高い成果を上げることは保証しないということが明らかになりました。また、上記3側面（行動的/言語的/情意的側面）のプロファイリングに着目した分析の結果から、期待された成果が得られなかったペアには、(1) 協力・協働的ではない、(2) (協力・協働的ではあるものの) 活動の目的が理解できていない、(3) お互いに受け身的、といった3つの特徴があることがわかりました。以上の結果に基づき、本論ではペアワ

ークを実施する際のポイントとして、教室内におけるペアワークの風土、ペアワークの意義・目的に対する理解、活動をリードする存在の重要性を挙げ、それぞれを踏まえた教育実践的示唆について具体的に論じています。

また、Hiromori et al. (2021) では、上記で明らかになった「活動をリードする存在」(リーダーシップ)の役割に焦点を当て、リーダーの有無がグループワークにおけるメンバーの動機づけやグループダイナミクスに与える影響について調査しました。具体的には、リーダー有りのグループとリーダー無しのグループを設定し、両グループに同様のグループワーク(英語による写真描写タスク)を行ってもらい、彼らの取り組みを複数の観点から比較しました。その結果、リーダーが“catalyst”となって、グループワークを活性化することは可能な一方、リーダーを割り当てなくても、グループはリーダーがいない状況に適応できること、その際にはメンバー全員の平等な参加・貢献が重要になることが明らかになりました。本論の結果からは、グループワークの中で起きていることはじつに多様であり、教師はペアやグループといった活動の形態だけでなく、活動の質にもより注目していくことの必要性が示唆されます。

在外研究期間中には、当該研究課題に関する科学研究費助成事業(科研費)の申請を行い、2020年度より基盤研究(B)の助成金交付を受けています(研究課題番号:20H01290, 研究課題名:英語学習における「やる気の伝染」メカニズムの解明)。また、研究成果の一部を一般の読者向けに書籍として発表する取り組みも行いました。具体的には、英語学習における動機づけの研究史を丁寧にレビューするとともに、小中高大といった各学校段階での動機づけを意識した教育実践を取り上げた『動機づけ研究の理論と実践:動機づけを仕掛けて』(大修館書店,2021年)、論文の基本的な構成や研究方法別の論文の書き方のポイントを整理したうえで、論文投稿の準備段階から実際の投稿・掲載までのプロセスを簡潔に説明した『英語教育論文執筆ガイドブック:ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』(大修館書店,2020年)などを執筆しました。さらに、小学校では2020年度、中学校では2021年度から全面的に実施される新学習指導要領に基づいて改訂された、令和3年度版の中学校検定教科書『NEW CROWN English Series 1, 2, 3』(三省堂)にも編集委員として関わりました。

今回の在外研究では、期間延長をいただいた2020年度はコロナ禍の影響があり、予定されていた国内外の学会・研究会の多くが中止・延期になるなど、予定していた研究活動が順調に進んだわけでは必ずしもありませんでしたが、そのような中でも先述したような一定程度の成果は上げることができました。このような機会を与えてくださった明治大学には改めて感謝するとともに、今回の経験を今後の教育・研究活動に大いに還元できるよう、引き続き尽力していきたいと考えています。重ねてになりますが、この度は貴重な機会を有難うございました。